

㈱ナイスの社員と同じ現場で働く仲間の中にも東北出身者がいて、震災以来家族の安否が不明だった。幸いなことに、しばらくして彼は、家族の無事を確認できたのだが、それは、多くの幼友達や近所の人々の死をも確認することでもあった。安否を知るまでの時間の長さには苛まされたであろうが、知った後の安堵と悲しみもまた辛いものであろう。被災地の誰もが体験したであろう現実なのだが、ボクは、強い衝撃を感じた。そうか、助かった人もおれば、助からなかった人もいた…。

ボクの故郷は、水俣市の隣町で、水俣病患者が多数暮らすまちだが、かつて父が呟いた一言が、彼の話とダブった。「あの頃、同じ職場の川本輝夫（水俣病患者連盟委員長）が発病したが、わしもいつ発病するのかと長い間不安だった。わしは患者連盟じゃなかったし、いろいろ評判は違うが、川本は立派な奴だったといまも思う」。発病した人もおり、背負って暮らし続けた人もいた…。

毎日繰り返される震災報道の中で、ある被災者が語っておられた。「助かったのは幸いだったが、あまりに沢山の死を見た。この落差を言い表す言葉はない」。あの戦争の後の日本人も同じ経験をしてきた。被差別部落の人々もまた、差別というものを同じ目線で



人に優しくすることによってしか癒されない深い悲しみ

見てきたのだろう。

部落の人々は、水平社の糾弾を経て、同和対策事業も経験しても、部落差別からの痛みから解放されたわけではなく、いまも解放運動を継続している。水俣病の患者の賠償請求も、何度かの和解を経ても、なお続いている。けれど、両者ともその営みは、世論が関心を持っていた頃とは装いを異にして、必ずしも周囲から共感されているわけではなく、少数派でさえある。ボクは、震災報道の一コマで聞いた「沢山の死者と生存した自分との落差、この心の傷を癒すものは見つからないが、せめて、人に優しくすることで癒されないものかと思っている」という言葉が心に残った。

部落解放運動でも、水俣病の運動でも、糾弾や損害補償を経て、いつかはその運動に終止符を打たなければならないという見解が、運動の内と外にある。もちろん、かつては有効で、共感も呼んだ運動でも、これからは漫然と続けるというのは戒めるべきだが、ボクは、人に優しくなることでしか心の傷は癒せないという思いは、なお相当の時間、継続されなければならないと思う。そういう趣旨の運動とはどんなものなのか、被災地での人々の営みが示唆してくれる気がする。

（株）ナイス代表取締役 畠田一幸



hidarimakiの
この逸編

ファーゴ



監督：ジョエル・コーエン
イーサン・コーエン
音楽：カーター・バーウェル
キャスト：フランシス・マクドーマンド
ステイヴ・ブシェー
ウィリアム・H・メイシー
製作：98年米作品
カラー 97min
DVD版：30巻記フォックス

ある劇作家が体験する不可解な事件と白昼夢を描いたコーエン監督の「バートン・フィンク」(91年)を見たのは、当時、茶屋町ロフト地下に開業したテアトル梅田ではなかったか。典型的映画の多いアメリカにあっては珍しいジョエル&イーサンという兄弟監督のこの作品は“何か変”で、僕自身の位置をずらされたような特異性があった。それ以降彼らの作品にはまっぴら、「ミラーズ・クロッシング」(91)・「未来は今」(94)・「オー・ブラザー」・「ブラッドシンプル」(00)・「ディボース・ショウ」(03)・「ノーカントリー」(07)などなどを追った。ブラックなセンスや幻想的手法を駆使し、或る時はファンタジー、或る時はサイコスリラー、また或る時は喜劇というふうに、あらゆるジャンルを横断していく多趣多芸な監督である。中でもコーエン兄弟のマスターピース(だと僕が勝手に思っている)が「ファーゴ」だった。

狂言として計画された単純な誘拐が、時間とともに傷口を広げ、深くし、遂にはさまざまな人間がその傷口に飲み込まれていく、という悲喜劇を描く。この映画の通奏低音となるのが日常性の小さなずれ(時間の誤差とか人間同士の認識の違いやタイミングなど)が、ゆがみ(狂気、恐れやあせり)を生むというもので、観客はとんでもない残酷なシーンを見せつけられる。拳銃が火を噴き、人が殺され、おびただしい血が飛び交うシーンも多い。狂気を宿す男の不気味さがいつ爆発するのか、いつまた人が殺されるのかわからないオカルトな味付けもある。そんな刺激やサスペンスをエンターテインメントとして楽しめるとしても、この映画の監督たちにとって重要なのは、“小さなずれとゆがみ”をモチーフとして息づかせることを最優先させる。この日常に棲む非日常の現れを映像化して見せた手腕は並みではない。残酷さや血なまぐささを見せつけられる一方で、人間の下世話な生活や、月並みなセリフに現実性を感じ、見終えたあとこの映画はアバンギャルドだったのだと実感する。

冒頭の雪景色に流れるケルト風の静かな音楽、早朝から出勤する妊婦の警察署長(大竹しのぶを彷彿とさせる風貌と演技の豊かさ)と、ちょっとおかしい夫とのちぐはぐさ、“変な顔”を持つ男と狂気の男の絶妙なキャスティングは、「ファーゴ」を構成するエレメントとして秀逸である。同じテーマを持つ姉妹的逸編「ノーカントリー」に先駆け、「ファーゴ」はそれ以上に味わい深く卓越した映画に仕上がっている。

hidarimaki

